

小・中学校社会科の思考力の系統的・段階的育成を目指す授業構成

—郷土の偉人を取り上げた社会科授業の開発を事例として—

(社会科教育講座) 井上 昌善

(教育臨床講座) 藤原 一弘

Study of Instructional Design for Elementary and Junior High School Social Studies that Aims to Systematically and Gradually Develop the Thinking Ability

-A Case Study of the Development of A Social Studies Lesson Featuring Local Greats-

Masayoshi INOUE and Kazuhiro FUJIWARA

(令和元年9月2日受理)

1. はじめに

本研究は、小・中学校社会科における思考力の系統的・段階的な育成を目指す授業構成の有効性について、郷土の偉人を取り上げた社会科授業の開発を通して実証的に検討することを目的としている。社会科の小中高の一貫性については、新学習指導要領等にも明記されており、学校段階に応じて、資質・能力を系統的・段階的に育成するための具体的な指導を含めた授業を構想することが必要である。一方で、異校種間の学習内容の系統性や指導法の段階性を考慮して資質・能力の育成を目指す実証的な社会科授業研究は、十分に取り組みられているとは言い難い。このことに関して唐木清志は、「教員の意識の上では、小中高の校種の間にある壁は依然として高い。

地理、歴史、公民（法・政治・経済等）、こういった学問領域は、初等社会科とは無縁と考えている小学校教員は少なからず存在する」⁽¹⁾と指摘している。この唐木の指摘から、教員の意識の希薄化が、学校段階の違いをふまえた社会科授業研究が発展しない原因の一つであることがわかる。しかし、従来の社会科授業開発研究の方法に関してもその原因があるように思われる。従来の社会科授業開発研究は、特定の学校種・学年の子どもを対象に実験授業を行い、授業構成論の有効性を示しているものが多く、小・中学校の学校段階の違いをふまえて授業構成論を提案し、その効果について実証的に検証するという研究は十分に行われてこなかった。子どもの資質・能力を中・長期的な視野で系統的・段階的に育成する

ための小中一貫した社会科授業論の検討が必要なのではないか。今後は、小中一貫して育成を目指す資質・能力を明確化し、その資質・能力を育成する授業構成原理に基づく授業の効果を検証する社会科授業研究を充実させていくことが必要ではないか。

上記のような問題意識に基づき、本研究では、社会科授業を通して育成が目指される資質・能力の一つである思考力に着目して、小・中学校における思考力育成を目指す社会科授業構成論の有効性の検証を行う。そのために、小・中学校で行った授業の効果について、子どものワークシートなどの成果物や授業記録の事実から育成された思考力の分析を行うことで明らかにする。社会科の思考力については、森分孝治の論に基づいて捉えることにする。森分は、社会科の思考力に関して「内容（知識・理解）と形式（思考技能）が一体となったもの」⁽²⁾と述べており、社会科授業を通して育成を目指す思考力は、「内容」と「形式」を含むものであると言える。この論をふまえ、小・中学校社会科を通して系統的・段階的に思考力育成を目指す授業構成論の有効性を検証することによって、学校段階の違いをふまえた思考力育成のための具体的な指導法についても模索したい。

2. 従来の小・中学校の一貫性に着目した社会科授業研究の特質と課題

(1) 小・中一貫教育を想定した社会科教育論の特質と課題

小・中学校の一貫性に着目して社会科授業について研究している白石等のグループは、小学校の学習内容は具体的であるのに対して、中学校における学習内容は抽象的になり、子どもたちは学習内容の意味を見出しにくい状態になっていると指摘している⁽³⁾。この研究成果から、小・中学校の一貫性を踏まえて社会科授業を開発、実践しようとした際に、学校段階に応じて、学習内容の理解をどのように深めるかが重要なポイントになることがわかる。

この点に関して、示唆的なのが山田秀和の研究成果である。山田は、アメリカのカリキュラムの分析を通して、「過去と現在を知る（小学校）→過去に学

び社会の見方・考え方を深める（中学校）→それらをもとにあらためて過去を解釈しその意義を評価する（高等学校）」⁽⁴⁾という小中高の歴史教育の連続性と段階的な発展性の原理を示している。山田論で示されている義務教育の学習過程に着目すると、小学校段階では過去と現在のつながりを実感的に理解させようとして、中学校段階では生徒が持っている見方・考え方を質の高いものへと転換させることを目指している。これは、異校種の歴史教育における教育内容の系統性やその指導法の段階性を示しており、子どもに育成したい資質・能力を系統的・段階的に育むための授業論を検討する際の手がかりとなるものである。一方で、歴史教育論の有効性に関して、具体的な授業実践に基づく検証は行われておらず、理念的なものに留まっている点に限界がある。授業記録などの具体的な事実の分析を通して、資質・能力としての思考力を系統的・段階的に育成する授業構成の有効性を実証的に解明する必要がある。

(2) 我が国における人物を取り扱った社会科授業開発研究の特質と課題

中教審答申の「小・中学校社会科における内容の枠組みと対象」を見ると、義務教育段階の学習内容には人物に関する事項が多く明記されている⁽⁵⁾。このことから、義務教育段階の社会科授業では、特に人物に関する事柄が学習内容の中心として位置付けられていることがわかる。小・中学校社会科の学習内容として、人物に関する事柄をどのように教育的に加工するか、それをふまえて育成を目指す思考力をどのように捉え、系統的・段階的に育成する指導をどのように行うのかという点が課題となる。このような課題を克服するために、従来の人物に着目した社会科授業開発研究の成果からその手がかりを得ることとする。梅津正美は、資質・能力の育成を目指す歴史人物学習論を提案している⁽⁶⁾。また、吉田正生は、従来の人物に着目した社会科授業研究の成果を整理し、意思決定力を育成する人物学習論を提案している⁽⁷⁾。これらの人物学習に関する研究は、主に歴史上の人物の行為としての意思決定に着目させ、複数の視点から考察させることで学習者の資質・能力を高めることを目指している点に特質があ

る。ただ、梅津論ではどのタイプの授業をどのように組み合わせて実践することが有効なのかという点については明らかにされていない。吉田論は自身も課題として指摘しているが、授業モデルを示すに留まっており、提案されている授業論の有効性や子どもの発達段階を踏まえた具体的な指導法については、実証的に明らかにされていない。つまり、人物を取り扱った社会科授業論の教育的効果の検証については、不十分であり、この点に限界があると言える。

これらのことをふまえ、本研究では、小中一貫で思考力育成を目指す授業構成論を検討し、その有効性を郷土の偉人を取り上げた社会科授業の分析を通して実証的に検証する。

3. 系統的・段階的な思考力育成を目指す社会科授業構成の原理と方法

(1) 本研究における思考力育成の論理

従来の社会科教育論における思考力に関する研究成果の中でも、多くの論文に引用されているのが森分孝治の論である。森分は、「社会科における思考力形成の鍵は、知識・理解にある」⁽⁸⁾と主張しており、知識・理解の質の深まりが思考の質の深まりと関連していることがわかる。また、森分は社会的事象の理解の仕方について、①事実の正確な理解、②目的論的理解、③社会的意味の理解、④歴史的意義の理解という四つの段階があるとし、①から④へと進むにつれて、理解の深まりが期待される⁽⁹⁾。この論は、小原友行の社会科における思考力育成論⁽¹⁰⁾の基盤となっていることから、思考力育成を目指す社会科授業は、原則として社会的事象の理解を目指しており、理解する過程には学習内容の系統性や子どもの発達段階をふまえた指導の段階性があることがわかる。ここで注目したいのは、森分の「社会科では、社会的意味の追求ということをはずしては、その教育の意味を失ってくるのである。ここでいわれる社会的意味の理解というのは、事実・事象を社会的事象の全体の中に位置づけ、全体との関連で捉えることができるということである」⁽¹¹⁾という主張である。このことから、学校段階に応じて思考力育成を目指す社会科授業を構想しようとした場合、子ども

自身の発達段階に応じて、意味づけできる社会集団・地域を学習対象として選定し、学習過程を組織化することが重要であることがわかる。特に、小学校では身近な地域における事象の社会的意味の理解を、中学校以降では身近な地域という限られた範囲だけではなく歴史的な視点など、より広い時間的・空間的な視点から事象を考察することで、社会的意味の理解を深めることがねらいとなる。

本研究では、認知的領域に特化して、子どもの思考力を捉えようとするこの森分論に加え、森本直人の理解に基づく社会科授業論からも示唆を得たい。森本は、理解型の授業の特長として、「認知的領域(知識や認識)と情意的領域(態度や意欲)の統一的な育成が容易である」⁽¹²⁾と述べており、このことから思考力育成を目指す社会科授業では、学習対象の人物に対して感情移入がなされる可能性が高いため、子どもの思考力を見とるためには、学習対象となる人物への共感＝情意面に関しても考察する必要があることがわかる。人物に対する共感に関しては、人物への「すごさ」についての判断基準を見とることで解明できると言える。また、人物への「すごさ」についての判断基準を構築し、批判的に問い直すことが「認知的領域(知識や認識)と情意的領域(態度や意欲)の統一的育成」につながり、思考力育成のためには重要である⁽¹³⁾。この「すごさ」の判断基準を構築し、再構築するという学習段階は、小学校と中学校の学校段階の違いに応じた授業構成を検討する上で重要な視点であると考えられる。

このことをふまえ、本研究では、社会科における思考力を「人物が置かれた状況に存在する問題を共感的に捉え、その問題解決を目指して取り組まれた行為や考えを把握し、その結果や影響に着目させることを通して、人物の行為の社会的意味や歴史的意義を理解することができる力」⁽¹⁴⁾と定義した。そのうえで、前述した理解の深化のための過程をベースとして、小・中学校における思考力の系統的・段階的育成を目指す社会科授業構成を検討する。

(2) 思考力の系統的・段階的育成を目指す社会科授業構成

本研究の授業構成論について、キース・C・バー

トン等の歴史教育論をふまえて検討することにする。彼らの論に拠れば、個人の物語を授業で取り扱うことは、歴史の学習に対する動機づけにつながり、抽象的な学習内容について、子どもたちの既知の知識を活用して、理解させることができる点に意義があることがわかる⁽¹⁵⁾。

一方で、留意点もある。それは、個人の動機や成果のみを強調することで、結果として十分な市民性育成につながらない⁽¹⁶⁾という点である。このような問題を克服するためには、その行動が行われた社会的背景やその人物の行為がもたらす影響などに着目させることで、その行為の意味や意義＝社会や個人にとっての役割について考察させたり、社会の諸課題の解決策について選択・判断させたりすることを通して、自己の考えを批判的に吟味する必要がある。このような自己の考えを批判的に吟味し、修正する学習過程を組織化することによって、単に外部から与えられた知識を覚える社会科授業に終始することを防ぐことができる。

以上のことをふまえ、本研究の授業構成原理について検討した。以下の表1は、「学校段階に応じた思考力育成の到達目標」と「授業構成原理」を示している。

表1 系統的・段階的な思考力育成を目指す社会科授業構成

学校段階に応じた思考力育成の到達目標		授業構成原理	
【小学校】 人物の行為の目的や影響に着目して考察することで、人物の行為の社会的意味について理解することができる。	【中学校】 人物の行為の目的や影響に着目して考察したことをふまえ、人物の行為の社会的意味を過去や現在の視点から捉え直したうえで、理解することができる。	パート1 「すごさ」の判断基準の構築	○第一段階「事実の正確な理解」 行為の内容の把握
			○第二段階「目的論的理解」 行為の目的についての検討
			○第三段階「社会的意味の理解」 行為の多面的・多角的な視点に基づく考察
		パート2 「すごさ」の判断基準の再構築	○第四段階「歴史的意義の理解」 過去や現在の視点に基づく行為の社会的意味の批判的検討

小・中学校の学校段階の違いについて検討する際には、前述した森分や森本の論に加え、熊田禎介の子どもの歴史意識の研究成果からも示唆を得た。熊田は、齋藤博の小・中学生の歴史意識の発達研究に関する研究成果について考察を行っており、その中で小・中学生の歴史意識について、「因果関係を直接的な因由で把握できはじめるのは4年生からであり、また間接的な因由で把握できはじめるのは中学1年生(12-13才児)であり、中学3年生(14-15才児)にはほぼ可能である。」⁽¹⁷⁾と言及している。このことから、小学校から中学校へと学年が上がるにつれて、歴史的現象の因果関係の複数性について、空間的・時間的な視点から考察させることを通して気付かせる指導が重要であることがわかる。よって、小学校では、「人物の行為の目的や影響に着目して考察することで、人物の行為の社会的意味について理解することができる。」という到達目標を設定した。中学校では、「人物の行為の目的や影響に着目して考察したことをふまえ、人物の行為の社会的意味を過去や現在の視点から捉え直したうえで、理解することができる。」という到達目標を設定した。

授業構成に関しては、まず「すごさ」の判断基準を構築する過程をパート1(第一段階から第三段階に相当)、構築したものを再構築する過程をパート2(第四段階に相当)として設定した。つぎに、パート1の第一段階「事実の正確な理解」では、人物の行為の内容を把握させる。第二段階「目的論的理解」では、人物の行為の目的について検討させる。第三段階「社会的意味の理解」では、人物の行為の意味を行為によって生じた結果や影響などの複数の視点に基づいて考察させる。このような段階を経て、人物の「すごさ」についての判断基準を構築することができるため、このパート1の段階を主に小学校の授業構成とした。

さらに、パート2の第四段階「歴史的意義の理解」では、過去や現在の視点に基づく行為の社会的意味の批判的検討を目指す。これによって、過去や現在の地域における状況の違いや共通点を把握することで、その人物の行為の意味の理解を深め、人物の「すごさ」についての判断基準を再構築することができ

る。パート1からパート2までを中学校の授業構成とした。

本研究では、思考力は、特定の校種、学年だけではなく小・中学校において一貫した授業構成原理の下で系統的・段階的に育成されるものであると捉えている。授業論の有効性を検証する際には、所謂「できる」と評価された特定の学習者の成果物だけに注目するのではなく、教室内の多様な学習者の成果物を評価しその結果をふまえて分析するように留意した。これによって、多様な思考のプロセスを解明することができ、思考力育成のための具体的な指導法の解明につながると言える。

4. 郷土の偉人を取り上げた歴史人物学習の開発

(1) 教材化の視点

本研究の中心教材となる人物は、19世紀終わりに道後温泉改修事業に尽力した伊佐庭如矢である。伊佐庭を教材化する理由は、三点ある。第一に、道後温泉改修事業に関する学習を通して、「持続可能性」に関する見方・考え方⁽¹⁸⁾を高めることができる点である。伊佐庭は「百年先を考えろ」という言葉を残しており、この言葉の意味は、将来の道後の繁栄を願うものであった。つまり、道後温泉の改修は、地域独自の観光資源を創造するためのもので、これに関連して地域活性化を目指す様々な開発が行われた。この開発に関する学習を通して得た知識は、持続可能な地域社会について考える際の手がかりとなり、人物の「すごさ」を判断するための基準となる。なお、本研究では、原科幸彦の持続可能性に関する論⁽¹⁹⁾に基づく知識を習得することが、「持続可能性」に関する見方・考え方を高めることにつながると考えた。以下の図1が、原科の主張する「持続可

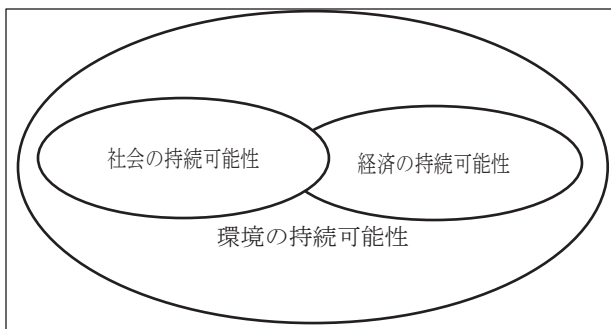


図1 「3つの持続可能性」についての論

能性」に関する論である。

原科は、持続可能な社会を形成するための基本的な考え方として、「3つの持続可能性」を示し、人間社会や経済活動の基盤が環境であることを強調している⁽²⁰⁾。この原科論から示唆されるのは、持続可能な社会を目指す取り組みについて、環境、経済、社会にどのような結果や影響を及ぼすかというアセスメントの視点から捉え、考察することが重要であるということである。このことから、伊佐庭如矢が行った道後温泉の改修事業に伴う結果や影響に着目させた学習を行うことで、持続可能性に関する見方・考え方を高めることができると言える。

第二に、伊佐庭如矢の道後温泉改修事業に関する学習を通して、19世紀後半の社会の特色⁽²¹⁾を捉えることができる点である。当時は、富国強兵政策に伴うインフラ整備、国内利益獲得競争が起こり⁽²²⁾、様々な社会的変容が生じていた時期であった。伊佐庭如矢は、このような社会状況をふまえて様々な決断をしていったと考えられる。よって、道後温泉改修が行われた理由や目的を、当時の社会状況などに着目させて捉えさせることで、当時の社会の特色を理解させることにつながると言える。このことについて、前述した原科の「3つの持続可能性」の論に基づいて検討すると、当時行われた道後温泉改修事業は、経済や社会の持続可能性を最優先して行われた地域活性化のための開発であったと捉えることができる。つまり、近代化が進む明治時代の社会で行われた主な開発は、人々の消費を促し経済活動を活性化させることを目的として行われており、道後温泉改修もこのような性質を持つ開発であったと言える。よって、伊佐庭が生きた明治時代の社会は、経済や社会を最優先する「持続可能性」を重視しており、現在の環境保全を最優先する「持続可能性」とは異なるものである。ただ、中尾敏朗が「持続可能な社会の実現は、自分たちの当面の利益や欲求とぶつかることが多い」⁽²³⁾と指摘しているように「持続可能性」を目指す開発を行う過程では何らかの問題が生じる。このことから「持続可能性」を目指す開発によって生じた問題やその解決方法について学習することは、当時の社会の特色を捉えること

につながると言える。

第三に、伊佐庭の政治的意思決定のプロセスに関する学習を通して、他者と合意を形成するための方法を学ぶことができる点である。道後温泉改修は公共事業であり、1880年代後半以降の自由民権運動の広まりや町制の施行⁽²⁴⁾にともなって、町民の意見をふまえて着工することになった。当時、道後温泉改修に対しては多くの反対意見があり、大規模な反対運動も発生した。この反対派の人々をいかに納得させるかが、伊佐庭の切実な課題であったと考えられる。伊佐庭が反対派の人々を納得させることができた理由を探究することで、公共事業を決定する際に生じる対立の解決方法を考える際の手がかりを得ることができる。

なお、伊佐庭の教材化を行う際に、特に重視した点は、子どもの既存の認識や情意をいかしつつ思考力を系統的・段階的に育成することである。松山市内の小・中学生は社会科以外の授業で、すでに郷土の偉人について学習をしており、郷土の人物のすごさについて何らかのイメージを持っている子ども

が多い。よって、子どもの既存の人物に対する評価観をふまえ、伊佐庭の行為の意味について理解を深めることで、伊佐庭のすごさについての判断基準を構築する授業を主に小学校段階で実施する。中学校段階では、道後温泉に関する問題や解決方法を理解させたいので、その解決方法の有効性や妥当性について考えさせることで、小学校段階で構築した伊佐庭のすごさの判断基準を問い直し再構築する授業を実施する。

(2) 単元の概要と実際①—小学校の場合—

表1中で示した小学校段階の到達目標をふまえて、より具体的な単元目標として、「道後温泉改修の意味について、改修の目的や道後温泉の役割の変化や社会への影響などの複数の視点から捉えることを通して理解し、伊佐庭が考えた百年先の社会像について表現できるようになる。」を設定した。小学校の単元の概要を示したものが、以下の表2である。なお、本授業は松山市内の公立小学校で、小学6年生を対象に、明治時代の本格的な学習に入る前の段階に位置付けて、授業の振り返りも含め3時間で行った。

表2 小学校社会科授業「道後温泉のヒミツ」の概要

授業構成		主な発問	主な学習内容
パート1 「すごさ」の判断基準の構築過程	第一段階 行為の内容の把握	○ふるさと松山学を読んで、郷土の偉人である伊佐庭さんについて知りましょう。(資料①)	○道後温泉改修に関わった人物で、道後温泉改修にあたって様々な問題を解決だから偉人とされている。
	第二段階 行為の目的についての検討	○伊佐庭さんが残した言葉「百年先を考えると！」がなぜ「名言」なのか、考えてみましょう。 ○伊佐庭さんは、温泉の改修を進めるにあたってどのような不満があったのだろうか？温泉改修に反対した人の言い分について書かれている部分に線を引いてみよう。(資料②) ○伊佐庭さんは、反対されたにもかかわらず道後温泉を改修した理由を考えていきましょう。	○「みんなのためにがんばること」「百年先もいまいちにするここと」 ○「建設後の収入を得ることができるのか心配だったから。」「工事費を回収することによって、町の財政を行き詰ませることになるから。」「財政が行き詰まると安心して生活ができないから。」 ○道後温泉を改修することで、道後をいい町にしたかったから。
	第三段階 行為の多面的・多角的な視点に基づく考察	○道後温泉をどのように「新しく」したのか？(資料③) ○新しくなった道後温泉は、地域にとってどのような温泉になったのか？ ○道後温泉以外にも当時つくられたものがあります。それは何ですか？(資料④) ○道後温泉を新しくすることによって、どのような「影響」があったのだろうか？当時の人々の生活は、どのようなになった？(資料⑤) ○膨大な費用を、どうやって集めたのだろうか？(資料⑥) ○伊佐庭さんが残した言葉「100年先を考えると」の意味を考えてみましょう。伊佐庭さんは、道後の街をどうしたかったのでしょうか？そのためには、何が必要だと考えたのだろうか？ ○伊佐庭如矢さんの「すごさ」について考え、あなたの意見を書いてみましょう。	○西洋技術を取り入れている。3階建てになっている。無料で入ることができる湯場もつくった。 ○有名な温泉になった。地域のシンボルになった。唯一無二の温泉になった。 ○道後鉄道や道後公園ができた。お店が増えた。 ○道後温泉関係の収入が改修前と後で約15倍違う。町民の生活(税の負担)も「松山」よりも楽である。これまで来ていたお客さんも困ることはなかった。 ○永代優待券を配布して協力を呼びかけた。 ○道後温泉にたくさんの人に来てもらいたかったのだと思います。そのために、道後温泉を西洋技術を生かした当時からすると珍しい価値ある建物にしたり、多くの人が道後に来やすくしたりするために鉄道などを整備する必要があったと考えます。つまり、価値ある観光名所をつくることによって、関連する産業が発展することになり、多くの観光客が来るような地域社会を伊佐庭さんはつくりたかったのだと思います。

第一段階では、行為の内容を把握する。ここでは、事前学習として松山市教育委員会が発行している副読本「ふるさと松山学」を活用し、伊佐庭如矢が偉人と評価されている理由について、道後温泉改修事業に着目させ、自分の意見をつくらせる。

第二段階では、伊佐庭が道後温泉改修を行った目的を捉えさせることを重視する。道後温泉改修に対して、多くの人々から反対された事実を確認し、「人々の不満」について資料に基づいて把握する。そのうえで、道後温泉改修への伊佐庭の思いや願いに着目させて、人々の不満解消のための取り組みについて考えるための見通しを持たせる。

第三段階では、道後温泉改修の社会的意味について考察する。ここでは、道後温泉の「変化」や人々の生活への「影響」といった視点に着目させることによって、道後温泉の役割について理解させる。まず、「道後温泉は改修によってどのように新しくなったのか？」と問うことによって、改修前後の道後温泉の変化を読み取る。つぎに、新しくなったのは道後温泉だけではなく、道後公園や道後鉄道など周辺の開発も行われ新しくなったことを把握することによって、湯治客を主なターゲットとする療養地から多くの人々が訪れ消費活動を行う観光地になったことに気付かせる。さらに、道後温泉改修による当時の人々への影響については、道後温泉改修前後の収入の変化や当時の人々の生活の様子が読み取れる資料を活用して理解させる。また、莫大な費用の回収方法については、永代優待券を配布して、人々の協力を得たことを確認する。その後、学習の振り返りを行い「百年先を考えると！」の意味についての意見を記入させる。

このような道後温泉の役割の変容に着目した学習を通して、道後温泉改修という行為の社会的意味を理解させることができ、伊佐庭如矢の「すごさ」の判断基準を構築することができる。

(3) 単元の概要と実際②—中学校の場合—

表1中で示した中学校段階の到達目標をふまえて、より具体的な単元目標として、「道後温泉改修の社会的意味を理解したうえで、伊佐庭如矢のすごさを過去や現在の視点から批判的に捉え直し、伊佐庭が考

えた社会像について表現できるようになる。」を設定した。中学校の授業の概要を示したものが、表3である。なお、本授業は松山市内の公立中学校で、中学2年生を対象に、明治時代の本格的な学習に入る前の段階に位置付け、5時間の小単元として実施した。中学校では、小学校の学習に加えて、道後温泉改修に対して反対している人々を納得させるために、伊佐庭が改修に取り組むまでの過程で取り組んだことや考えたことを学習し、その中から最も重要だと思えるものを選択・判断する学習活動を行う。

第一段階から第二段階では、基本的に小学校の実践と同じように、伊佐庭如矢の功績の中でも道後温泉改修事業に注目させ、改修の目的について理解させることを目指す。

第三段階では、反対派の人たちを納得させるために行ったことを把握したうえで、その行為の意味を複数の視点から考察させた。例えば、「なぜ、この時期に道後温泉を改修する必要があったのか？」という問いや「温泉改修の決定はどのようにして行われたのか？」という問いについて、資料に基づいて考察させることで、当時の社会状況に加えて、反対している人々の合意を得るための取り組みについて理解させる。これによって、伊佐庭は当時の社会状況や温泉改修に伴う社会への影響をふまえて、人々の納得を得るための取り組みを行ったことを理解させることができる。

第四段階では、これまで学習したことをふまえて、当時伊佐庭が行ったことや考えたことの中で、反対派の人々の納得を得るために最も重要だと考えることを選択・判断させ、意見をつくらせたうえで、伊佐庭の行為を過去や現在の視点から捉えさせ、吟味する学習を行った。まず、伊佐庭の行ったことや考えたことの中で、反対派の人々の納得を得るために最も重要だと考えたことをワークシートに記入させる。つぎに、現代における道後温泉の社会的役割とその保存修理に伴って発生する課題を理解させたうえで、過去と現在の道後温泉を新しくすることによって発生する課題の類似性や違いについて資料に基づいて考察させる。そして、「現代の道後温泉修理に伴う課題を伊佐庭は解決できるか？」と問い、これ

表3 中学校社会科授業「伊佐庭さんはなぜ偉人？」の概要

授業構成		主な発問	主な学習内容
パート1 「すごさ」の判断基準の構築過程	第一段階 行為の内容の把握	○伊佐庭如矢はなぜ偉人と言われているの？(資料①) ○反対派の人たちは、どのようなことが不満だったのだろうか？(資料②) ○伊佐庭さんは反対派の人々を納得させるために、どのようなことを考え、行動したのか？	○何かすごいことをしたから。道後温泉をつくったから。 ○無料だった温泉が有料になること、膨大な改修のための費用とその回収方法、財政の行き詰まりによる生活への負担増加など。 ○道後温泉改修について説明をした。人々の理解を得ることができるようにならばよかった。
	第二段階 行為の目的の検討	○反対派の人々を納得させるために、伊佐庭さんが考えたことや取り組んだことの中で、あなたが最も重要だと考えたことは何だろうか？(課題①) ○反対する人が多い中で、それでも道後温泉改修を行ったのはなぜなのだろうか？	○私は、多くの人々に自分の考えを説明したことがとても重要だと思いました。 ○人々の生活が豊かになるような地域にしたいから。多くの人が訪れるような地域にしたいから。
	第三段階 行為の多面的・多角的な視点に基づく考察	○伊佐庭さんが道後温泉改修事業を進めていく中で行ったことについて、主に以下の①～⑤に関することを学習していきましょう。(資料③～⑥) ①なぜ道後温泉を改修しようとしたのか？②道後温泉をどのように新しくしたのか、温泉以外に何を造ったのか？③温泉改修による人々への影響は？④温泉改修の決定はどのように行われたのか？⑤改修のための費用はどうやって回収したのか？	①当時はコレラが流行し、多くの人が殺到したため、衛生上の問題が発生した。当時は各地域が競争する社会であり、他地域に負けない温泉を造る必要があった。②3階建てになっている。西洋技術を取り入れた建築物になっている。無料の湯を造った。道後鉄道や道後公園を造り、店が増えて多くの人が訪れるようにした。 ③道後温泉本館の改修後、収入は10倍以上に上がった。④道後温泉は明治23年に町営になった。温泉改築に関して、町民に図面を使って説明して意見を聞いてから議会を行った。⑤当時の地主は、寄付を行うという慣習があった。資金提供に協力者に温泉の永代終身優待券を配って回収した。
パート2 「すごさ」の判断基準の再構築過程	第四段階 過去や現在の視点に基づく行為の社会的意味の批判的検討	○これまでの学習をふまえて、①～⑤の視点の中であなたが最も優先すべきだと思う考えや取り組みを1つ選択してみよう。また、その理由も書いてみよう。 ○最も優先すべきだと思う考えや取り組みを班で1つにまとめてみよう。理由もまとめてみよう。 ○これまでの学習をふまえて、伊佐庭さんが、当時の社会で反対してきた人たちの理解を得るために考えたことや取り組んだことである①～⑤の中で最も重要と考えたことについて最終的な自分の意見を記入しよう。それを選んだ理由も書いてみよう。 ○現代の道後温泉の修理事業に関する課題は何だろうか？野志市長のメッセージから読み取ってみよう。(資料⑦) ○他に、現代の道後温泉の修理事業に関する課題はあるのだろうか？(資料⑧) ○明治時代と現代の道後温泉を取り巻く状況はどのように変わっているだろうか？ ○道後温泉は地域にどのような影響を及ぼしているのだろうか？ ○明治時代と現代の道後温泉の修理事業に関する課題を比較して、「似ていること」や「違うところ」はあるだろうか？ ○現在の道後温泉の修理事業に関する課題を考えていく上で、現代の課題である①～④に対して、明治時代に伊佐庭さんが行ったやり方で解決できるだろうか？班で、「解決できる」「解決できない」にグループ分けして、その理由も考えてみよう。 ○伊佐庭さんが残した言葉「100年先を考える」の意味を考えてみましょう。伊佐庭さんは、道後をどうしたかったのでしょうか？そのためには、何が重要だと考えたのだろうか？ ○伊佐庭さんの「すごさ」について考え、あなたの意見を書いてみましょう。	○私は、②変化を選択しました。理由は、道後温泉だけでなく、より客を寄せつけ、道後が栄えるためには、接客も大切ですし、道後温泉以外で人々が道後に来たいと思ってもらえるようなものが必要だと思いました。移動が楽になる鉄道で誰でも気楽に來られて、他に多くの店を出し、食べ物などで人気がでると思いました。 ○私たちの班は、④公正を選択しました。理由は、町人の意見をまとめることにより消費を増やして、活性化させ、良い道後温泉をつくれるからです。 ○私は、②変化を選択しました。理由は、道後温泉を2階から3階に変えたり、鉄道で移動しやすいうようにし、他に多くの店を出し、道後温泉目的で来た人に店のものを買って消費してもらい、より道後を栄えさせることができるということを町人に説明し、それで理解を得ることもできるなどと思いました。 ○①集客が減ること、②子どもや孫の世代まで受け継ぐこと(形を変えずに保存する)、③経済に影響が出ることなどがある。④騒音や渋滞など地域住民への影響。 ○宿泊客がこれ以上減れば、旅館同士の奪い合いが激しくなり、共倒れしてしまう。工事の場所を確保するために道後温泉本館周辺の道路で実施される交通規制をどうするかも問題である。 ○伊佐庭如矢が生きた明治時代から見て、日本の人口は右肩上がりに上昇している。これからの日本の人口は減少することが予想される。外国人観光客が増加している。 ○松山市の観光客消費が生み出す「雇用者誘発数(現況)」は約6千人であり、松山市内の雇用者の約3%に相当している。年間約70万人の観光客が松山を訪れ、約600億円以上の経済効果がある。 ○「似ているところ」は、①集客が必要(旅館同士の客の奪い合い)なこと。②修理に多くの費用が必要なこと。③経済効果がなくなるのではないかと不安。「違うところ」は、①外国人の受け入れ。②工事の規制。③形を変えずに受け継いでいくこと。 ○道後温泉以外にも他の多くの店があるし、工事しながら営業するという方針なので、集客が減少することはないと思います。明治は、そのままの形を変えないということは、考えておらず、重要文化財に指定された今では、形をそのまま保存しなければならぬので、孫の世代まで受け継ぐのは伊佐庭さんの取り組みでは難しいと思います。 ○伊佐庭さんは百年経っても他にまねできないような道後だけのものをつくらないと思いませんか？、「百年先を考える」といったのではないかと思います。 ○もしも私が道後を再生させようと思ったら、とりあえず道後温泉をきれいに大きく改造することを考えます。ですが、伊佐庭さんは百年先を考え、他にまねできないような道後の町を栄えさせようと考えたことがすごいなと思います。それに町民からは反対され、それと奥さんも亡くしても辛い思いをしたかもしれませんが、あきらめずに道後の町への強い愛が伊佐庭さんの努力によって町民の心に伝わり、成功させたことがすごいなと思いました。

まで学習したことをふまえて考えさせることを通して、伊佐庭の「すごさ」に関する判断基準を問い直させる。このように過去と現在の視点から道後温泉に関する課題の解決策を考えさせる学習を通して、過去や現在の社会状況の類似性や違いをふまえて道後温泉の役割を捉えさせることができ、道後温泉の歴史的意義の理解を深めることにつながる。

以上のような学習を通して、伊佐庭如矢の「すごさ」を対象化し、批判的に検討することで、子どもの「すごさ」の基準の再構築を促すことができる。

5. 開発単元の分析

(1) 授業の教育的効果①—小学校の場合—

ここでは、小学校での授業実践の教育的効果を明らかにするために、授業後の児童のワークシートの記述内容（「百年先を考えろ」の意味について記入しよう。伊佐庭の「すごさ」って何だろう。という問いに対する意見）を分析した。分析する際には、特に社会的意味の理解の深まり（認識）や伊佐庭のすごさの判断基準（情意）に注目した。表4は、評価基準と全体の傾向、表5は評価AからCまでの児童の思考力の実際、表6は児童の主な意見を示したものである。

A評価とした児童は、全体の20%だった。彼らの主な記述は、「百年先道後温泉が残っているためや観光客が来ても思い出に残してもらいために」と思いました」や「百年先も道後温泉がつぶれず繁盛し、愛媛県を目立つ県にしたかった」というものであった。この記述から、A評価の児童は、道後温泉改修の目的について把握しており、観光地としての道後温泉の役割、つまり社会的意味について理解することができていることがわかる。また、持続可能な地域を形成するためには、地域資源の活用が重要であることに間接的にはあるが気付いていると推察できる。

B評価とした児童は、全体の68%だった。彼らの主な記述は、「百年たっても他の人がよかったなと思ってもらいために」と思いました」や「百年先も道後温泉が続いていくために今のことだけじゃなくて、これからこうなるかなと予想をしてつくったり行動する」というものであった。これらの記述から、B評価の児童は、

表4 小学校実践における評価基準と全体の傾向

評価	評価基準の内容と割合	全体の傾向
A	伊佐庭如矢の理想とする社会のあり方について、道後温泉改修の意味や意義をふまえて具体的に説明することができており、持続可能性に関する考え方を読み取ることができる。25名中5名(20%)	A評価だった児童は、道後温泉改修の目的に関して、改修された道後温泉の社会的な役割(観光資源としての道後温泉)に着目して説明することができていた。B評価だった児童は、伊佐庭が考えていた社会について大まかに説明はできているが、「他の人がよかったなと思ってもらいために」といった具体性に欠ける記述内容であった。C評価の児童は、「百年後もいい道後であるように」というような理念的で具体性に欠ける記述内容だった。
B	伊佐庭如矢の理想とする社会のあり方について、説明することができており、道後温泉改修の目的について大まかに理解することができているが、道後温泉改修の意味や意義は理解することができておらず持続可能性に関する考え方も読み取ることができない。25名中17名(68%)	
C	伊佐庭如矢の理想とする社会のあり方について具体的な説明ができておらず、持続可能性に関する考え方も読み取ることができない。25名中3名(12%)	

表5 本実践における評価A~Cの児童の思考力の実際

思考力育成を目指す社会科授業構成原理	A評価の児童	B評価の児童	C評価の児童
パート1「すごさ」の判断基準の構築	↓	↓	↓
○第一段階「事実の正確な理解」 行為の内容の把握			
○第二段階「目的論的理解」 行為の目的についての検討			
○第三段階「社会的意味の理解」 行為の意味の多面的・多角的な視点に基づく考察			

表6 児童の主な意見

評価	「百年先を考えろ」の意味に関する意見	「すごさ」に関する意見
A	1 百年先道後温泉が残っているためや観光客が来ても思い出に残してもらいためにと思いました 2 百年先も道後温泉がつぶれず繁盛し、愛媛県を目立つ県にしたかった。愛媛を有名にするための改修だと思えます。	1 自分から行動しているところがとてもすごいと思いました 2 死ぬまで人々のことを誰よりも考え、道後温泉を最後まで愛し続けた人、リーダー的存在
B	3 百年たっても他の人がよかったなと思ってもらいために 4 百年先も道後温泉が続いていくために今のことだけじゃなくて、これからこうなるかなと予想をしてつくったり行動する 5 百年先も道後温泉が続いて人気が出続けるようにする	3 他人や道後温泉のことも百年後のことも思いつくった 4 みんなに何を言われてもそのことを実行しようとしたところ 5 町や道後温泉のために誰よりも必死になったこと。自分から考えて行動し、仲間と協力したこと
C	6 百年後もいい道後であるようにとといった願い	6 自分のしたいことを実行するところ

伊佐庭が考えた社会像についてイメージすることができており、道後温泉改修の目的について伊佐庭の思いや願いに基づいて大まかに理解できていることがわかる。ただ一方で、道後温泉に関する社会的意味の理解は不十分であった。

C評価とした児童は、全体の12%だった。彼らの主な記述は、「百年後もいい道後であるようにといった願い」というものであった。これらの記述から、C評価の児童は、伊佐庭如矢の理想とする社会像について具体的なイメージを持つことができておらず、道後温泉改修の目的についても不十分な表現に留まっていることから、十分な理解ができていないことがわかる。

「すごさ」に関する児童の記述を見ると、伊佐庭の「心や意思の強さ」や「人間的な強さ」、「道後への愛情」という語句が目立つ。「町や道後温泉のため」や「他者のため」に行動したことや「未来のことを考えていたこと」、「仲間と協力したこと」に着目した記述もある。このことから児童は、伊佐庭如矢という人物の「心や意思の強さ」や「郷土愛」という心情に関することに加えて、自分以外の他者＝当時生きた人たちや未来の社会の人たちのために「働きかけ」たことや「行動したこと」に対して「すごさ」を感じていることがわかる。全体的な傾向として、将来を見据えて、他者に協力を求めて働きかけたことに「すごさ」を感じていると言える。本単元の範囲内では、評価が高い児童ほど、「自己とは異なる他者のために行動したこと」と「郷土愛を持っていること」に対して、「すごさ」を感じる傾向があることがわかる。

(2) 授業の教育的効果②—中学校の場合—

ここでは、中学校での授業実践の教育的効果を明らかにするために、小学校と同様に、授業後の生徒のワークシートの記述内容を分析した。なお、分析する際の視点も小学校実践の分析と同様に、特に社会的意味の理解の深まり（認識）や伊佐庭のすごさの判断基準（情意）に着目した。表7は評価基準と全体の傾向、表8は本実践における評価A~Cの生徒の思考力の実際、表9は生徒の主な意見を示したものである。A評価とした生徒は、全体の11%だっ

た。主な記述には、「伊佐庭さんは百年経っても他にまねできないような道後だけのものをつくらないと意味がない」とい、「百年先を考えると」といったので

表7 中学校実践における評価基準と全体の傾向

評価	評価基準の内容と割合	全体の傾向
A	伊佐庭如矢の理想とする社会のあり方について、道後温泉改修の社会的意味や意義を過去や現在の視点から考察したことをふまえて具体的に説明することができており、持続可能性に関する考え方を読み取ることができる。34名中4名(11%)	A評価だった生徒は、道後温泉改修の意味や意義に関して、改修された道後温泉の社会的な役割(観光資源としての道後温泉)をふまえて説明することができていた。また、持続可能性を追究する中で、課題が生じることについて説明している生徒もいた。B評価だった生徒の記述は、伊佐庭が考えていた社会について「他の人がよかったなと思ってもらうため」といった大まかな説明に留まっているものが多かった。しかし、道後温泉が観光資源であることや将来を見通すことの必要性について説明している記述が多くあった。C評価の児童は、「何かを実行するなら百年先も残すつもりで必死にやろう」というような理念的で具体性に欠ける記述内容であった。
B	伊佐庭如矢の理想とする社会のあり方について、道後温泉改修の社会的意味や意義をふまえて具体的に説明することができており、持続可能性に関する考え方を読み取ることができる。34名中28名(83%)	
C	伊佐庭如矢の理想とする社会のあり方について具体的な説明ができておらず、持続可能性に関する考え方も読み取ることができない。34名中2名(6%)	

表8 本実践における評価A~Cの生徒の思考力の実際

思考力育成を目指す社会科授業構成原理		A評価の児童	B評価の児童	C評価の児童
パート1 「すごさ」の判断基準の構築	○第一段階「事実の正確な理解」 行為の内容の把握			
	○第二段階「目的論的理解」 行為の目的についての検討			
	○第三段階「社会的意味の理解」 行為の意味の多面的・多角的な視点に基づく考察			
パート2 「すごさ」の判断基準の再構築	○第四段階「歴史的意義の理解」 過去や現在の視点に基づく行為の意味の批判的検討			

表9 生徒の主な意見

評価	「百年先を考える」の意味に関する意見	「すごさ」に関する意見
A	1 伊佐庭さんは百年経っても他にまねできないような道後だけのものをつくらないと思いがなく、「百年先を考える」といったのではないかと思います。学習を通して、伊佐庭さんは第一に道後の町の将来を考えているなど強く思いました。今だけ栄えているだけでは意味がなく伊佐庭さんは百年先の道後の将来をみすえて百年経っても町が栄え続けるような町づくりを目指したんだなと思いました。 2 道後温泉を造る時にはそのすごさはあまりわからないけれど、百年先まで大切に受け継いでいき百年先の人たちも利用してもらうことで、これまで積み重なってきた歴史をずっと残していけるということ	1 もしも私が道後を再生させようと思ったら、とりあえず道後温泉をきれいにでかく改造することを考えます。ですが、伊佐庭さんは百年先を考え、他にまねできないような道後の町を栄えさせようと考えたことがすごいなと思いました。それに町民からは反対され、それで奥さんも亡くしとても辛い思いをしたかもしれませんが、あきらめずに道後の町への強い愛が伊佐庭さんの努力によって町民の心に伝わり、成功させたことがすごいなと思いました。 2 現代の改修工事のときに出てくる課題を解決するためのヒントとなることを残し、道後温泉を松山のほこりとして今まで受け継げるようにしたこと
B	3 今から百年先を考えて、今何をすれば正しいのか(道後温泉が人々のためになるのか)を考えて行動しろという意味 4 百年先に何があるのか、どんなことが起こるのかを考えて、そのためのヒントを残しておくこと	3 道後温泉の改修に反対する人を説得させたこと。100年後の道後のことを第一に考え、子どものため、孫のためと反対する人を説得しているところから道後の町に対して愛を感じました 4 悲惨な状態にあった道後温泉を100年先を考えて再生させたのがすごいと思いました。今の道後温泉があるのも伊佐庭如矢のおかげだと思いました。
C	5 道後温泉を百年先まで受け継ぐこと 6 未来について考える	5 道後温泉を改築したと 6 松山の人々をまとめた。今の町を変えた。

はないかと思えます。今だけ栄えているだけでは意味がなく伊佐庭さんは百年先の道後の将来をみすえて百年経っても町が栄え続けるような町づくりを目指したんだなと思いました。」というものがあつた。この記述から、この生徒は、この地域にしかない唯一無二のものとして道後温泉を捉えており、持続可能な地域社会を形成するためには、道後温泉のような付加価値を有する名所をつくることの必要性に気付いていることがわかる。また、「道後温泉を造る時にはそのすごさはあまりわからないけれど、百

年先まで大切に受け継いでいき百年先の人たちも利用してもらうことで、これまで積み重なってきた歴史をずっと残していけるということ」という記述もあつた。この記述から、この生徒は、道後温泉を後世に受け継いでいくためには人々に利用されることが必要であり、このことが持続可能な地域社会をつくるためには重要であることに気づいていることがわかる。これらのことから、A評価の生徒は、道後温泉には、人々に利用される「機能」や「役割」があることを理解しており、このような「機能」や「役割」を後世に受け継いでいく重要性に気付いているとともに、その営みが歴史であると捉えていることがわかる。

B評価の生徒は、全体の83%だった。主な記述としては、「今から百年先を考えて、今何をすれば正しいのか(道後温泉が人々のためになるのか)を考えて行動しろという意味」というものがあつた。この記述から、持続可能な社会の実現を目指すためには、道後温泉の社会的役割について考えることが重要であることに気付いていることがわかる。また、将来の世代への影響について考え、見通しを持って行動することの重要性について説明している記述が多いことから、道後温泉の役割について大まかに理解することができていることがわかる。

C評価の生徒は、全体の6%だった。彼らの主な記述は、「道後温泉を百年先まで受け継ぐこと」という漠然としたもので、他の記述を見ても伊佐庭の行為の結果しか表記されておらず、伊佐庭の理想とする社会像について具体的な説明はされていなかった。このことから、道後温泉改修による地域社会や人々への影響や道後温泉の役割についての理解は不十分であると推察できる。

「すごさ」に関する生徒の意見には、伊佐庭の地域の人々への「働きかけ」を通して「反対していた人々の理解」、「説得」や「課題解決」につながったというものが目立つ。また、「道後温泉を人々から注目されるものにしたこと」というように、地域の道後温泉の役割に着目した意見があつた。このことから、道後温泉改修を実行するうえで、生じた課題を解決するための方法を考え行動したことや、反対し

ていた人々の合意を得たこと、地域活性化のために道後温泉に付加価値をつけ、その地域にしかないものを生み出したことや道後温泉周辺の開発を通して、地域資源を効果的に活用する仕組みをつくったことに対して「すごさ」を感じていることがわかる。なお、評価が高い生徒ほど、自分の考えと伊佐庭の考えを比較させ、その違いを説明することができる傾向があることがわかる。

(3) 小・中学校社会科における系統的・段階的な思考力育成の指導法の検討

これまでの分析結果を受けて、小・中学校社会科授業の系統的・段階的な思考力育成のための指導法について検討する。小学校の実践において、多くの児童は、人々の生活を豊かにすることと道後温泉改修との関係については説明できておらず、「社会的意味の理解」の段階まで達している児童は一部に留まっていた。また、人物の「心や意思の強さ」や「郷土愛」という心情に関することに加えて、自分以外の当時生きた人々や未来の社会の人たちのために「働きかけ」たり「行動したこと」について「すごさ」を感じていた。また、評価が高い児童は、「自己とは異なる他者のために行動したこと」と「郷土愛を持っていたこと」に対して「すごさ」を感じる傾向にあった。中学校の実践においては、多くの生徒は人物の行為の内容や目的をふまえて、行為の結果や影響に着目して、道後温泉の役割を説明することができていたことから、「社会的意味の理解」の段階まで達していた。一方で歴史的意義を理解していたのは一部の生徒に留まった。また、小学生とは異なり中学生は、道後温泉改修に対する反対派の人々の合意を得たことや既存の地域資源を活かした取り組みについて「すごさ」を感じていた。評価が高い生徒ほど、自己と伊佐庭の考えを比較させ、その違いを説明することができる傾向にあった。

これらのことをふまえて、小学校社会科において思考力育成を目指す指導を行う際に、特に重視することは、人物の行為の「目的」を理解させただけで、人物の行為によって生じた「結果」や「影響」に着目させ、社会的事象の「機能」や「役割」を捉えさせることで「社会的意味の理解」を促すことである。

この理解を促す過程では、人物の「思いや願い＝心情」や「他者への働きかけ＝他者のために行ったこと」を事例として示すことが有効であろう。このような学習を通して、人物の「すごさ」に関する判断基準を構築することができる。一方で、中学校社会科において思考力育成を目指す指導を行う際に特に重視することは、人物の行為を対象化し、複数の視点から考察させることである。過去や現在において生じる課題の解決を目指して行われた人物の行為の妥当性や有効性を複数の視点から捉え、吟味することによって、「すごさ」に関する判断基準を問い直し、再構築を促すことができる。

以上のことから小・中学校社会科授業において系統的・段階的に思考力を育成するためには、学年が上がるに従って事象の社会的意味についての理解の深化を促すための指導が必要であることがわかる。小学生や中学生にとっての道後温泉の役割と、観光業に携わる人の道後温泉の役割に対する理解は、その立場によって異なってくる。道後温泉が果たしている機能や社会的役割を多面的・多角的に捉えたり、その役割を担うようになった来歴を捉えたりすることが、社会的意味の理解の深化につながり、思考力育成に寄与すると言える。つまり、過去や現代などの「時系列」や影響などの「つながり」といった視点を学校種や子どもの発達段階の変化に応じて増やし、社会的事象の意味について多様な解釈を促すことが、系統的・段階的な思考力育成のためには重要なのである。

6. おわりに

本研究の成果は、小・中学校社会科において、系統的・段階的に思考力育成を目指す授業構成論の有効性を実証的に検討した点である。小・中学校社会科において思考力を系統的・段階的に育成するためには、事象を捉えさせる視点を段階的に増やし、社会的意味について多様な解釈を促すことで理解の深化を目指すことが必要である。

今後は、高等学校も含めた社会科授業研究のネットワークを構築し、思考力などの資質・能力の系統的・段階的な育成を目指す授業開発研究について継

続的に取り組んでいきたい。

【註】

(1) 唐木清志「社会的事象の見方・考え方の内容とその育成原理—問題解決的な学習の充実を求めて—」江口勇治監修・編著『21世紀の教育に求められる「社会的な見方・考え方」』帝国書院、2018年、p.13.

(2) 森分孝治「社会科における思考力育成の基本原則—形式主義・活動主義的偏向の克服のために—」全国社会科教育学会『社会科研究』第47号、1997年、p.3.

(3) 白石真矢・倉本哲男・富永千晶「小中一貫教育を見据えた社会科教育論の新視点—Service-Learningとエンゲストロームの活動理論から—」佐賀大学教育学部研究紀要、No.1、Vol16、2011年、pp.239-261.

(4) 山田秀和「小・中・高の歴史教育における段階性—現代社会理解のためのストラテジー—」全国社会科教育学会『社会科研究』第75号、2011年、p.18.

(5) 中央教育審議会答申別添3-17 以下のURLを参照した。

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_3_1.pdf (2019年2月1日付確認)

(6) 梅津正美「資質・能力ベースの歴史人物学習の授業デザイン」『社会科教育』明治図書、NO.710.2018年6月号、pp.4-7.

(7) 吉田正生「新しい「人物学習」の構想—制度・しくみを構想する力を育成するために—」『社会科教育研究』全国社会科教育学会第58号、2003年、pp.1-10.

(8) 前掲(2)、p.2.

(9) 森分孝治「社会科における社会認識の論理—現行学習指導要領の分析から—」広島大学教育学部紀要、第一部23号、1974年、pp.257-267.

(10) 小原友行「社会科でこそ育成する「思考力・判断力・表現力」」小原友行編著『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン中学校編』明

治図書、2009年、pp.9-13.

(11) 前掲(9)、p.261.

(12) 森本直人「理解としての社会科の授業づくりと評価」『社会科教育実践ハンドブック』全国社会科教育学会編、明治図書、2011年、p.28.

(13) 森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書、1978年、pp.86-87

(14) 思考力の定義に当たっては次の文献も参考にした。ハロルド・O・ラッグ/渡部竜也・斉藤仁一朗・堀田諭・桑原敏典(訳)『アメリカ人の生活と学校カリキュラム』春風社、2018年、pp.288-294.

(15) キース・C・バートン・リンダ・S・レヴステイック(著)『コモン・グッドのための歴史教育 社会文化的アプローチ』春風社、2015年、p.250-251.

(16) 前掲(15)、p.251.

(17) 熊田禎介「小・中学校のつながりを捉えた歴史的な見方・考え方の育成」江口勇治監修・編著『21世紀の教育に求められる「社会的な見方・考え方」』帝国書院、2018年、pp.154-163.熊田は、齋藤博の次の文献について考察している。齋藤博「歴史的意識の発達」『信濃教育会教育研究所紀要』第19集、pp.23-59.

(18) 森分孝治「社会的なものの見方考え方の拡大・進化・体系化」広島大学附属小学校学校教育研究会『学校教育』NO1000、2000年、pp.36-39.

(19) 原科幸彦『環境アセスメントとは—対応から戦略へ—』岩波新書、2011年、p.30.

(20) 前掲(19)、pp.30-31.

(21) 「近代化」については、次の著書を参考にした。三谷太一郎「日本の近代とは何であったか 日本の問題史的考察」岩波新書、2017年.

(22) 高久嶺乃介「農村と都市」『日本の歴史』朝日新聞出版、2014年、pp.22-24.

(23) 中尾敏朗「持続可能な社会とこれらかの歴史学習—現代の社会が「わかる」歴史学習に向けて—」日本社会科教育学会『社会科教育研究』NO.113、2011年、p.27.

(24) 愛媛県生涯学習センターが公開しているデータベース『えひめの記憶』の「愛媛県史 県政自由民権運動・地方制度の成立」を参照した。

<http://www.i-manabi.jp/system/regionals/regional/s/encode:2/51/view/6656>(2018年7月31日付確認)

【参考文献】

・小・中学校の社会科授業実践に関する資料については以下の通りである。

○小学校の授業実践で使用した資料

①門田奈保美・真部佐恵「百年先を考えろ」「ふるさと松山学 語りつぎたい ふるさと松山 凜として立つ 百話Ⅰ」松山市教育委員会、2011年、pp.206-217.

②同上、pp.211-214.

③「道後温泉増補版」松山市観光協会、1982年、p.145.

④同上、明治二十八年の道後温泉絵図を加工した。

⑤「道後温泉増補版」松山市観光協会、1982年 p.385.p.411.

⑥『道後温ブラタモリ』NHK「ブラタモリ」制作班、角川書店、p.44.

○中学校の授業実践で使用した資料

①門田奈保美・真部佐恵「百年先を考えろ」「ふるさと松山学 語りつぎたい ふるさと松山 凜として立つ 百話Ⅰ」松山市教育委員会、2011年、pp.206-217.

②同上、pp.211-214.

③「道後温泉増補版」松山市観光協会、1982年、p.145.

④同上、明治二十八年の道後温泉絵図を加工した。

⑤「道後温泉増補版」松山市観光協会、1982年 p.385.p.411.

⑥『道後温ブラタモリ』NHK「ブラタモリ」制作班、角川書店、p.44.

⑦2018年7月15日広報「まつやま」1面野志市長メッセージ

⑧2014年11月13日朝日新聞朝刊25ページ、2016年8月23日朝刊31ページ

【附記】

本研究は、平成30年度愛媛大学研究活性化事業の支援を受け、平成30年度10月に開催された愛媛大学教育学部研究倫理委員会の承認を得て取り組んだものである。なお、本研究は、授業実践の記録、

ワークシートの分析、個人情報取り扱いに関して研究協力校の学校長に対して事前に説明を行い、承認を得たうえで遂行した。

本稿は、第1章から第4章、第5章(1)(2)、第6章を井上昌善が、第5章(3)を藤原一弘が執筆し、最終的に2名で全体の調整を行った。